

<研究報告>

主体的な活動としての放課後実践を通じた 高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもへの 社会性発達支援の試み

平野幹雄（東北文化学園大学）

鈴木 徹（東北大学教育学研究科・宮城教育大学特別支援教育総合研究センター）

野口和人（宮城教育大学）

要約

本稿においては、筆者らが高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもを対象におこなっている社会性発達の支援のための放課後実践について、その概要と開始から1年半の間の子どもの様子について紹介することを目的とした。対象児は、11歳から17歳までの高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子ども5名であった。筆者らの放課後活支援においては、対象児が鉄道やコンピュータに興味を持っていたことから、両者を組み合わせて子どもがしたいと思う活動として組織した。具体的には、双方向型のブログの運営と定例会の開催、一日旅行を通じて支援をおこなった。学校行事と日程が重なる日以外の対象児の参加状況はほぼ皆勤であった。定例会を重ねることで、対象児から積極的に挨拶をする様子、自らの発言に対する他者の関心の有無に注意を払う等の変化が見られた。これらの変化は、長期的な支援をおこなったこと、筆者らの実践が対象児において主体的に参加できる場として機能したことによると考えられた。また、鉄道という共通の土俵ができたこと、リアリティをもって長期間かかわりを続けたことによって、対象児にとって筆者らが親しくもリスペクトされる存在となったことが重要であると考えられた。

はじめに

高機能自閉症あるいはアスペルガー症候群の子どもの中核的な障害は社会性の障害である。知的機能に障害のない彼らにとっては社会性の困難の改善こそが喫緊の課題と言えよう。従来の研究で社会性の困難の改善への取り組みとして最も知られているのはソーシャルスキル・トレーニングであろう。筆者らは、高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもを対象としたソーシャルスキル・トレーニングの現状と課題についてレビューを行

った(平野・鈴木・野口, 2009)。その結果、短期的な取り組みがほとんどであること、効果が認められる場合においても般化が課題となっている取り組みが多いこと、加えて、そうした取り組みの多くは子どもに主体を置いたものではないことが見いだされた。彼らは社会性の困難を抱えるため、本来社会性を身につけるべき活動に参加する機会が制限されている、あるいは参加する機会自体はあったとしても、その中で結局は孤立してしまう可能性がある。それゆえ、子どもが主体的、積極的に取り組めるような活動を組織し、そうした活動を長期的に行うことを通じて、社会性の発達を促す支援を行う必要があるものと考えられた。

今回は、上記のことを受けて筆者らが行っている高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもを対象とした放課後実践について、その概要と開始から1年半の間の子どもの様子について紹介することを目的とした。

方法

参加者

11歳から17歳までの高機能自閉症およびアスペルガー症候群の男児5名。加えて、筆者ら大学教員、大学院生、学部学生、同卒業生を含む計29名が放課後実践のメンバーとして登録された(平成21年4月末現在)。

筆者らの放課後支援の枠組み

筆者らは、具体的な実践を開始するに当たって Cole(1996)の実践の枠組みを参考にした。Coleはソビエトの心理学者ルリヤの弟子であり、後にアフリカでの数学教育プロジェクトに参加した。現地の子どもたちが、数学の学習が進まなかったにもかかわらず、実際の生活の中で数概念など数に関する知識を獲得し使用していることに注目し、「子どもの認知発達には彼らが育つ文化や文脈の中で成し遂げられる」として文化文脈説を提唱した(Cole 1976; Cole, 1996)。その後、独自の支援システムを各々の文化の中に人工的に作り出すことを目的とした第五次元という名の放課後実践を開始した(筆者の一人がその放課後実践に参加した際の様子は平野(2003)が紹介している)。筆者らが組織した放課後活動(鉄道研究部会と称した)においては具体的に次のことを参考にした。第一は、子どもが積極的にしたいと思う活動を設計することである。Coleの実践では、教育的に効果のあることに子ど

もの興味を結びつける意図があった。我々の実践では、彼らが鉄道やコンピュータに興味を持っていたことから、両者を組み合わせて社会性発達の支援を行うこととした。第二は、文字や口頭でのコミュニケーションが豊富に生じる活動を作り出すことである。Coleの実践ではコミュニケーションを道具として捉えており、それらが問題解決の目標や方略構築において頻繁に用いられることが重要と考えていた。筆者らの実践においては、双方向型のブログの運営と定例会の開催(ブログへの投稿内容の振り返りをおこなう)、一日旅行(企画コンペをおこなって旅程を決定した)を通じておこなうこととした(図1)。第三は、コンピュータを用いたコミュニケーションが豊富に生じる活動を作り出したことである。Coleの実践においては、男児と比較してコンピュータを用いた活動を女兒があまりしながらないことへの配慮として、コミュニケーションするためにメールを書くことが用意されていた。筆者らの実践において女兒は含まれていなかったが、次の理由によりコンピュータを用いたコミュニケーションを重視した。つまり、他者とのコミュニケーションを苦手としている高機能自閉症及びアスペルガー症候群の子どもが自分のペースに合わせてブログに投稿可能であること、彼らに視覚的な要素を用いた援助が効果的であると言われていること(別府・奥住・小淵, 2005)から、写真等を利用することが可能であることである。また、対象児にルールを遵守させたことも Cole の実践と共通していた。特に、投稿は一日一回まで(コメントは制限せず)というルールを設け、投稿だけでなく他者の投稿にコメントすることを促した。以上の点を含めながら、自らの投稿やコメントがその後ブログ上に残ることで自らの発言の振り返りを促す仕組み、他者の存在を意識させるような仕組みを作成した。参加者には会ったことのない人や架空人物も含まれており、そうした人とのコミュニケーション

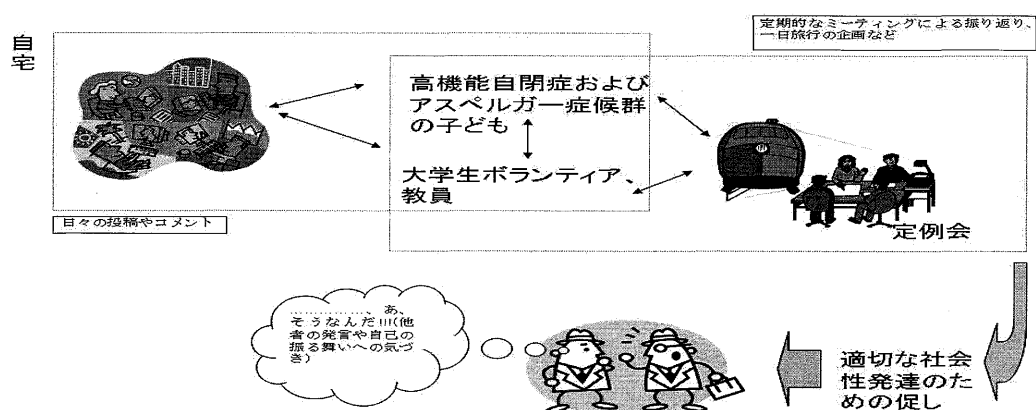


図1. 筆者らの放課後支援の枠組みについて

ンをどう図るかについても分析可能とした。また、定例会では、投稿者自身が投稿を皆の前で振り返り、自身の投稿あるいは説明や議論においてソーシャルスキルが適切に発揮されているか、大学教員や大学生・大学院生ボランティアが適切な助言をする場とした。

定例会は、毎週火曜日の16時より18時まで筆者らの大学の研究室で開催された。2009年度は筆者ら大学教員の都合により17時から19時までとした。

放課後支援を開始して1年半が経過して

2008年2月にブログを開設以来、10000件を超えるアクセス、投稿数は600件以上であった(2009年8月末現在)。対象児によるこの間の投稿数は、2008年3月から8月までが87件、2008年9月から2009年2月までが69件、2009年3月から2009年8月までが168件であった。同じくコメント数は、2008年3月から8月までが113件、2008年9月から2009年2月までが114件、2009年3月から8月までが209件であった(図2)。2008年度の定例会への対象児の参加状況については、学校行事と日程が重なる日以外はほぼ皆勤であった。

定例会を重ねることで、対象児には次のような変化が見られた。まずは挨拶に関して、支援の開始当初は対象児から「こんにちは」、「さようなら」といった挨拶がなされること

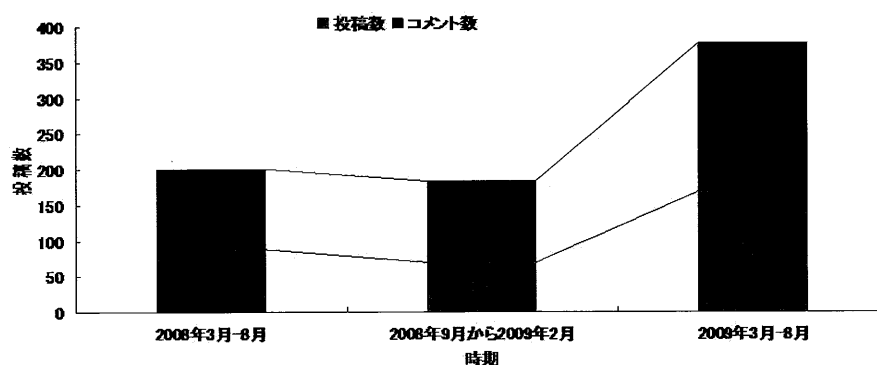


図2. 鉄道研究部会における子どもの投稿数、コメント数の推移

は稀であった。挨拶の無かった際にはその旨を指摘し、また定例会の開会、閉会時には必ず全体で挨拶をするように心がけた。最近では、対象児から周囲の人間へ積極的に挨拶をする様子が見られるようになってきた。発言内容に関して、対象児は鉄道に関する話題、それ以外の話題を問わず自分の興味関心を一方的に語りかけ、話を終えるとスーッとその場を立ち去ってしまうことが多かった。ところが、やがて「なんでみんな俺の話を聞いてくれないんだ」という旨の発言をする対象児、つまり自らの発言に対する他者の関心の有無に注意を払う対象児が現れた。また、ブログ運営を開始した当初には、他者のコメントに対してコメントバックすることはほとんど無かった。その後徐々に、コメントにおけるターンの増加が見られた。対象児同士でコメントバックをすることも見られるようになった。ただし、互いにコメントバックをしているうちに、他者に対して攻撃的な内容になってしまう傾向にあった。さらには、定例会において各々の投稿の振り返りを行っていた際には、他者の発言に割り込んでしまう、質問の順番を守れない、他者への誹謗中傷をおこなうなどのことが見られた。このような状況は1年半の間に徐々に変化した但其の経過は個々の対象児によって異なっていた。以下では5人の対象児のうちA君の様子を取り上げて、放課後実践を通して見た彼の変化についてさらに掘り下げて報告する。

A君の様子について

A君は2008年の4月から放課後支援に参加している男児である(当時小学5年生)。A君は鉄道への関心が高く鉄道全般に関する知識が豊富であり、居住地域近郊で運行されている機関車の撮影に興味があるようだった。

以下に2008年4月から1年半のA君の様子について記述する(A君の投稿数の推移と主立ったエピソードについては図3を参照のこと)。入会時には、母親と一緒に会場に来了。A君本人は落ち着きがなく「塾に行くからすぐに帰る」と言っていた。母親は用事があつて直ぐに自宅へと戻らねばならず、「Aの帰るタイミングについては本人に任せます」と言つて帰つて行つた。定例会の始まる前のA君は落ち着きが無く「早く帰りたい」と繰り返して言っていたが、結局は自分が主張していた時間になつても全く帰ろうとせず、「来週から塾の曜日を変更します」と言つて帰宅した。翌週から学校行事の時以外はほぼ皆勤であり、「(鉄道研究会のために)来週の野外活動をどうやったら休むことができるか考えています」と言っていたほどであつた。入会から2ヶ月目までのブログへの投稿に関しては他の時期よりも多かつた。この頃の特徴として、投稿数と自らの興味への拘りがあげられた。

投稿数そのものは多いものの写真の質はぶれてしまっていたり、途中で切れてしまっていたりと良くなかった。

次の二ヶ月では投稿数が減った。その頃にあった出来事として、自分の好みの機関車について大学生に一方的に執拗に話しかけ、大学生から「興味がない」と言われて信じられないような表情をしていたこと、他の対象児より写真の質について皆の前で批判されるといったことがあった。その後の数ヶ月は、ブログへの投稿、コメントともほとんどなかった。一方で定例会には毎回参加し、以前よりも積極的に他者とコミュニケーションを図り楽しんでいる様子が観察された。この頃、母親と話した際には「家でもルールを意識して見通しを持って生活できるようになってきた」との報告があった。

A 君が鉄道研究会に参加するようになって 10 ヶ月が経過した後、高校生の B 君が会員に加わった。B 君は、鉄道に関する知識、写真の技術などで他の対象児より抜きん出ている。B 君の実力を認めたくない対象児がいる中、A 君は直ぐに B 君の実力を認めて「B 君のようになりたい」と尊敬する旨の発言を繰り返していた。またこの頃、過去の投稿写真を全て振り返る機会があり、筆者ら大学教員や大学生から A 君の最近の投稿写真を褒められた。その前後から、A 君のブログに投稿される写真の質が向上し投稿数も再び増加した。その後、6 年生になると、投稿数はまた減少したものの写真の質は依然として高く、加えて周囲に自分の投稿について評価を求めるようになった。

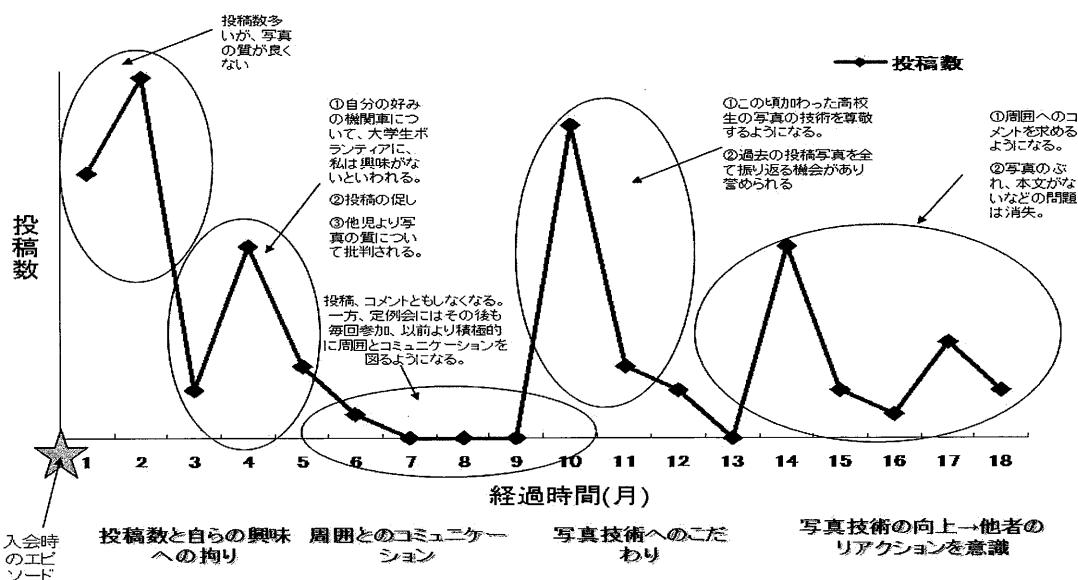


図3. A児における放課後支援への参加後の経過

まとめ

今回は、筆者らの行っている高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもを対象とした放課後支援について、その概要と開始から1年半の経過について紹介することを目的とした。

筆者らが支援を始めて1年半が経過し、その間対象児たちの様子が徐々に変化してきた。例えば今回紹介したA君は、参加当初こそ投稿数に拘って対象物が全て収まっていない写真やぶれてしまっている写真でも平然と投稿していたが、投稿数こそ減ったものの徐々に周囲から賞賛されるレベルの写真を投稿するようになった。加えて、自分の投稿に対して他者のコメントを求めるようになってきた。これらのことから、ブログへの投稿に際して、他者の存在を意識するようになったと言えるだろう。そればかりでなく、図1に示したように、1年半という期間の中で紆余曲折ありながら徐々に他者とのコミュニケーションを楽しむ様子が見られるようになってきた。

本来、対象児の年代の子どもは塾やスポーツ活動など、また友達と個人的に遊ぶことをもって放課後生活を過ごし、その年代に求められる社会性を学んでいくはずである。一方、我々の対象児は社会性の困難があるがゆえに、筆者らの活動に参加するまではそうした場に参加することが難しい、あるいは参加したとしても集団の中で孤立してしまうことが多かったものと推察される。支援の開始から1年半が経過する間、対象児たちの参加状況はほぼ皆勤であった点、また一日旅行などについては、対象児全員自ら参加の意思を表明し、基本的な連絡や話し合いもまずは親ではなく筆者らと子どもとの間で直接行われていた点(重要な案件はその後親にも報告した)で、対象児にとって積極的、主体的に取り組む実践として機能したと言えよう。一方、従来行われてきたソーシャルスキル・トレーニングなどの高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもを対象とした社会性の支援は子ども本人に主体性があるとは考えにくく、子どもが自然に取り組めるような活動の重要性が指摘されてきた(Ozonoff, Dawson, and McPartland, 2000)。それゆえ、筆者らの主宰した放課後実践が、子どもにとって主体的かつ積極的に取り組める場として機能したことがまずは意義あることだと考える。

ところで、ロールプレイのような架空の場では無く、リアルな実践の場を通じて支援をおこなってきたことも、上記の変化が生じたことと関係しているだろう。Damasio(1994)は、ある前頭葉損傷患者が架空場面での(社会的な)意思決定課題は健常者同様にできるにもかかわらず、日々の生活場面において社会性に困難を有していることを報告している。

それゆえ、リアリティのある場面において生じている困難を直接取り上げて支援する必要があるだろう。筆者らの実践においても、一日旅行の企画コンペを行った際に行き先を巡って互いに一方的な主張を繰り返し、子ども同士誹謗中傷しあうといったことがあった。

「意見が一つにまとまらないうと何処にも行けなくなるよ」というアドバイスをしたところ、自分の意見が採用されなかった子どもも、旅行に行くことそのものを優先させて決定事項に何とか応じることができたという出来事があった。子ども同士で誹謗中傷までに発展しながら、最後は折り合いをつけることができたのは、リアルな場面だからこそ生じた展開だと思われる。リアリティがある場面だからこそ、周囲と誹謗中傷しあっても自分の意見を貫き通したいと思う、あるいは最終的には旅行そのものには参加したいと思うのであり、このようなやりとりを通じて支援を行うことで徐々に他者の存在を気にかけることができたのではないかとと思われる。

最後に、対象児同士で誹謗中傷する様子や、大学生ボランティアを鉄道に詳しくない人と見なして自分より下に位置づけるなどの問題は、A君に限らず他の対象児にも依然として生じていた。上述したように、対象児は他者の存在は気にかけることができるようになってきているが、鉄道の話題に詳しいか否か等、独断的な基準で相手との上下関係を推し量る傾向にあった。一方で鉄道に詳しい大学教員らにはそうした振る舞いは少なかった。佐伯(2007)は“発達のドーナツ論”を提唱し、自己(I)が発達していくときに YOU の役割、つまり「その人の身になってくれる人、その人のことを親しく思ってくれる人、その人の意図を理解してくれる人(佐伯, 2007)」を果たしてくれる人の存在が重要であり、I は YOU を媒介にして社会・文化の実践社会(THEY)を垣間見るということを通して発達していくと主張している。実際のところ、対象児は筆者ら大学教員と対象との間で鉄道を通じてのみでなく、学校でのこと、家庭でのことなども話題にするようになり、またそれらに関するアドバイスに耳を傾けるようにもなりつつある。つまり、鉄道を通じて I と YOU との関係がまさに構築されたと捉えられよう。本来、高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもにとって、佐伯の述べている関係を他者と構築することがまずもって難しいはずである。にもかかわらず、筆者らとの間に上記の関係が構築できたのは、鉄道に詳しい対象児と筆者らが出会ったことで、鉄道という共通の土俵(のようなもの)ができあがったこと、その土俵の中でリアリティをもって長期間かわりを続けたことによって、対象児にとって筆者らが親しくもリスペクトされる存在となり、佐伯の述べているような YOU の条件を満たすことができたためであると考えられた。

文献

- 1) 別府 哲・奥住秀之・小淵隆司 (2005) 自閉症スペクトラムの発達と理解. 全障研出版部.
- 2) Cole, M. (1974). *Culture and thought*. A psychological introduction. New York; John Wiley & Sons. (若井邦夫訳 (1982) 文化と思考. サイエンス社.)
- 3) Cole M. (1996). *Cultural psychology. A once and future discipline*. Cambridge; Harvard University Press. (天野 清訳 (2002). 文化心理学—発達・認知・活動への文化-歴史的アプローチ. 新曜社).
- 4) Damasio, A.R. (1994). *Descartes' Error: Emotion, Reason, and the Human Brain*. New York; Harper Perennial. (田中三彦訳 (2000) 生存する脳. 講談社.)
- 5) 平野幹雄 (2003). 実生活上の認知活動をどう捉えるか : 障害児者を対象とした研究への、マイケル・コールによるフィールドワークの手法の応用可能性について. 保健福祉学研究, 2, 55-68.
- 6) Ozonoff, S., Dawson, G., & McPartland, J. (2000). *A parent's guide to Asperger syndrome & high-functioning autism*. New York; Guilford press. (田中康雄・佐藤美奈子訳(2004). みんなで学ぶアスペルガー症候群と高機能自閉症. 星和書店).
- 7) 佐伯 胖 (2007) 共感. 育ち合う保育のなかで. ミネルヴァ書房.

謝辞

本稿を執筆するにあたり、常日頃ご助言をいただいている電気通信大学の橋山智訓准教授とお茶の水女子大学の長谷川武弘講師に感謝の意を表します。